

## 研究ノート

## 墓地からみる現代中国の政治と宗教

小林宏至

## はじめに

2013年12月26日、習近平国家主席ら中国共産党の政治局常務委員7名はそろって毛沢東の遺体が安置されている天安門広場の毛主席記念堂を参拝した。その日がちょうど毛沢東の生誕120年目であったためである。同日、毛主席記念堂に隣接する人民大会堂で開催されたシンポジウムにて習主席は、「群衆路線」や「独立自主」といった毛沢東思想の言葉に触れ、中国型資本主義の意義を強調するとともに毛沢東のこれまでの功績を主張した。1960年代に始まった文化大革命は、1976年に毛沢東が北京の中南海で亡くなるまで続き、民間信仰や祖先祭祀を含むすべての宗教活動は政府の厳しい管理下に置かれていた。毛沢東の死後も「四人組」によって文革体制の継続が画策されたが、後ろ盾を失った彼らはまもなく失脚、1978年12月に鄧小平の主導により改革開放政策が打ち出され、段階的に宗教活動が復興されるようになっていった。

はじめに中華人民共和国「建国の父」である毛沢東を例に、現在の中国における宗教活動の復興状況を概観しておきたい。毛沢東が生まれ育った湖南省韶山市には彼の生家が残されている。毛沢東の生家は改革開放以前から政府主導により「革命聖地」として愛国主義教育の一環として観光開発が進められ、1961年には国の重要文化財に指定。彼の生誕100年目にあたる1993年には高さ10.1mの銅像が建造され、1997年には愛国主義教育の基地として認定されるようになった。こうした政府による観光開発は一見すると偉大な指導者を讃える共産党による愛国活動であり、宗教活動と無関係なように見える。しかし実際はそうではない。なぜなら改革開放以降、特に1990年代頃から同地を訪れる人々は、政府による「愛国主義教育」や「革命聖地」としての意義とは違った視点で毛沢東および毛沢東故居を訪れているからである。

韶山市は人口12万人ほどの山村に過ぎないが、2014年現在も、日々参拝客が後を絶たず、1時間待ちの列を並んでも毛沢東の像へ参拝する人々が集っている。参拝客のなかには、企業幹部や公務員なども含まれ、昇進祈願や企業研修の一環として同地を訪問しており、毎日数十件の団体による献花行事が行われている。また一部報道では、同地の人々は毛沢東の肖像画の前で結婚式を挙げることを「常識」と考えており、同地で毛沢東は現世利益をもたらしてくれる「神様」として認識されているという。かつて文革を推進し、宗教活動を否定してきた毛沢東自身が「神様」となり人民の厚い信仰を集めるというのは皮肉なことだが、毛沢東の故居が政治的な文脈から切り離され、宗教的な様相を帯びているのは間違いない。それを的確に示しているのが、毛沢東故居における「滴水洞」の事例であろう。毛沢東故居は主に、毛沢東の生家、毛沢東像がある広場、滴水洞で構成されるが、韓によれば近年ある理由により滴水洞の人气が高まっているという。それは滴水洞の風水が非常に優れているためである。毛沢東は裕福であったとはいえ農民の出身であった。しかしそんな彼が立身出世できたのは彼の祖父の風水がよかったからであるという言説が人々に広く信じられ、彼の祖父の墓地があ

る滴水洞の観光客が後を絶たない。人々はよい風水にあやかろうとそこを訪れるのである [韓 2008: 244-246]。

ここでいう風水とは祖先から子孫へと父系出自をたどって流れる「気」の概念である。漢族は祖先をよい風水の場所に埋葬すると、一族が繁栄するという考えを有しており、人々は毛沢東が成功した理由を、彼の祖父が埋葬されている墓地に求めた。毛沢東の祖父は滴水洞から良い風水の影響を受け、その墓地から父系出自を流れる良い「気」の影響が毛沢東の父、毛沢東へと作用をしていると理解したわけである。宗教活動が制限されている中国社会において、良い風水を体験するために滴水洞を訪れる観光客の多くは、共産党教育の一環として同地を訪れるわけではなく、また特定の宗教活動、いわゆる仏教、キリスト教、イスラム教、道教といった宗教活動の一環として同地を訪れるわけでもない。人々が滴水洞を訪れるのは、良い風水の影響を自身も体感してみたいという目的のためであり、現在の日本で言うところの、パワースポット概念に近い様相を見せている。多くの人々は個々人の神秘的な体験、あるいは現世利益的な目的を求めて同地を訪れているのである。このように毛沢東の故居は、一方で宗教活動に否定的な中国共産党の愛国主義教育の基地であるが、他方で神秘的な価値を見出す人々にとっての特別な場所となっている。本報告では死者を祀る場所である墓地を、中国政府がどのように管理・演出しているか、またその場所に人々がどのように参与しているかという問題を考察するなかで、宗教活動を政治的に制限することが、かえって宗教活動の政治性を高めているという状況を描き出していく。

## 1. 政治指導者の墓地がもつ両義性

2013年が毛沢東生誕120年にあたることは先に述べたとおりだが、同年が習仲勳元副首相の生誕100周年にあたることはあまり知られていない。習仲勳氏は中国共産党草創期からの古参幹部であったが、これまで対外的に政治の表舞台で目立つことはなく、党の最高決定機関である政治局常務委員会のメンバーになったこともなかった。しかし2013年になって、同氏の記念切手が発行されたり、中国中央テレビ(CCTV)にて彼の生涯がテレビドラマ化されたりと、元最高指導者なみの扱いで彼の功績が讃えられている。なぜ生前、党内の序列がそれほど高くなかった習仲勳氏が現在になってこのように大きく評価されているのだろうか。それはひとえに彼が現在の中国の国家主席、習近平氏の父親であることによる。習近平政権は、習仲勳を介して現政権が中国共産党の「正統な系譜」をひくものであることを演出しているのである。習近平氏は中国共産党のなかでも「太子党」と呼ばれる政治グループに属するが、父親である習仲勳氏が毛沢東とともに、決して平たんでない中国共産党の歴史を歩んできたことを人々に示すことは、現在の執政者として大きな意義をもつのである。もちろん、そこには別の政治的な意図があることも十分に指摘できる。しかしいずれの理由にせよ、習近平政権が習仲勳氏の評価を新たにすることで権力基盤を強固なものにしようとする姿勢に変わりはない。

習仲勳の生誕100年目にあたる2013年10月15日、習仲勳の陵墓がある陝西省富平県には、多くの政治指導者が集まり盛大に記念行事が行われた。陵墓は同氏の死後すぐに農地をつぶしてできたもので7千㎡の規模を誇る。陵墓は一般人に向けても公開されていたが、陵墓の入り口では手荷物検査、身体検査などの厳しいセキュリティチェックが行われた。なぜなら陵墓内で抗議の焼身自殺を企てたり、政府批判のビラをまいたりする行為が懸念されたからである。陵墓周辺は記念行事が行われる数ヶ月前から、陳情のために集まった人々であふれかえっ

ていた。彼らは用地買収や親族の冤罪などを国家の最高指導者へ直訴するために、全国各地から訪れた者たちであり、習仲勲の陵墓はあたかも北京の「陳情村」の様相を呈していた。このように習仲勲氏の陵墓は、政治指導者側からみれば、現政権基盤を強化する場なのであるが、現状に不満を抱える人々にとってそれは抗議活動を行うための恰好の場となっている。

一方で、現在共産党政権が人々の注目を避けるようにしている、かつての指導者の墓地もある。その代表的なものといえば「四人組」の一人、江青の墓であろう。江青は毛沢東の四番目の夫人であり、1966年からはじまる文化大革命時に大きな権勢をふるった人物である。彼女の墓は北京市郊外の西山風景区福田霊園にあるが、そこに「江青」という名前は刻まれていない。彼女は生前、女優として活動しており何度か「芸名」を変えていた。よく知られている江青という名前は毛沢東と結婚し、文化大革命の時期に中央政治局委員に就いたときの「芸名」である。しかし墓石にはあまり知られることのない彼女の本名が次のように刻まれている。

### 1914年～1991年 先母李雲鶴之墓 娘 娘婿 外孫建立

中国の墓碑は、墓碑を建てた人物の名前を一緒に刻むのが一般的だが、ここではそれが行われていない。つまり意図的にこれが江青の墓であることが分からないようにしているのである。実際、墓地への埋葬は彼女の死後10年経った2002年に行われており、香港のメディアにスクープされるまで彼女の墓地の存在は広く知られることがなかった。では、なぜ彼女の墓は他の政治指導者とは異なり、公的な形で大々的に祭祀されることがなかったのであろうか。それは中国共産党が、現在でもなお彼女の文革時の政策を評価していないためであろう。当時の政治的な立場だけで見れば、習仲勲よりも江青の方が、社会的な影響力は間違いなく大きかった。しかし現政権は彼女がとった政策を否定的にとらえており、彼女との歴史的な「接合」を拒否しているのである。このように政治指導者の死者祭祀の場は、一方で中国共産党の現政権と旧政権を「接合」する（あるいは接合しない）象徴的な意味を持っており、他方で習仲勲の陵墓が「陳情村」に化したり、江青の墓の存在を（文革期の政策に反発をもっている人々に破壊されないように）一般に公開しないなど、政権が抱える不安定な社会問題を浮き彫りにする舞台にもなっている。

## 2. 漢族の民俗知識における「鬼」「神」「祖先」

ここまで述べたように、中国社会における政治指導者の墓地は、過去と現政権をつなぐ関節になることもあるし、意図的に関節を外すこともある。そのような両義的な役割を墓地は演じているのである。しかし死者を祀る場は、そうした墓地の政治的両義性とは異なったレベルでも価値が見出されていることに触れておく必要があるだろう。たとえば習仲勲の陵墓は2002年の完成と同時に、愛国主義教育の基地と認定されたが、民間レベルでは良い風水が得られる場所としても報じられている。毛沢東の故居における滴水洞の事例と同様、風水がよい場所として人々にとらえられ始めているのである。また、江青の墓地の事例では、江青の墓の存在を人々に知られないようにする理由として、彼女の娘である李訥が母親の墓の存在を隠したことがあげられる。彼女は、「四人組」のひとりであった江青の政策を支持するという意図で墓地を守ろうとしたのではなく、李訥自身の母親として墓地が暴かれることを案じてそのような措置をとったのである。これらの行為は政治的というよりも、極めて民間信仰的であり、そこから漢族の儒教的な思考を垣間見ることができる。ここで漢族の儒教的な考え方、価値体系を少し掘り下げ

てみたい。

漢族社会の古典的な死生観において人間は、死後、肉体と靈魂に分かれるとされており、死者の靈魂は、理念的には、さらに天上界と地上界へと分かれていくと考えられている。そのうち天上に昇っていく靈魂は魂と呼ばれ、地上へ降りてくる靈魂は魄と呼ばれる [加地 2011]。この魂と魄の漢字の傍の部分に「鬼」の字があてられているように、漢族の死生観において人間の肉体を離れ浮遊する靈魂は、「鬼」と呼ばれ、靈性的な存在として認識されている。とりわけ誰のものか分からない「鬼」は、人々に害悪をもたらす危険な存在としてとらえられている [Wolf 1978、志賀 2012、渡邊 1991]。つまり、人間は死後、肉体と靈魂とに分かれるが、自分の父方の祖父母、曾祖父母といった明確に（父系の）系譜をたどることのできる靈魂は「祖先」として祭祀の対象となり、また歴史的英雄、著名な偉人など、人々に厚く崇められる靈魂は「神」として現世に顕現する。たとえば「祖先」の例で言えば、先の風水の話にあったように、祖先の骨を良い風水の場所に埋葬すると、子子孫孫へ良い風水の影響が波及し、一族が繁栄すると考えられており、毛沢東や習近平の成功も風水によって語られることが多い。また「神」に関して言えば、三国志の登場人物である関羽が、義を重んじる人物であることから商売の神様として祀られたり、前述の毛沢東が湖南省韶山市では「平安神」として祭祀されているのはその好例といえよう。しかし一方で、人々に祀られることのない靈魂は「鬼」として人々の前に現れ、病や怪死をもたらすものと考えられている。

「祖先」、「神」、「鬼」というのは非常に状況依存的な存在であり、特に「祖先」であるか「鬼」であるかは立場の違いによって異なって現れてくるものである。というのもA一族にとっての祖先は、B一族にとっての「鬼」（あるいは「神」）となり、逆にB一族にとっての祖先は、A一族にとっての「鬼」（あるいは「神」）となる可能性をもつからである [Wolf 1978 : 146]。渡邊は漢族の民俗知識におけるこの「鬼」の性格を分析し、「鬼」の動的なモデルを提唱した。すなわち、「鬼」はア・プリオリに人間界の外部に位置する無秩序的、無体系的なものではなく、「祖先」や「神」として変化する可能性を潜在的に有していることを指摘した [渡邊 1991 : 184 ~ 190]。つまり、「鬼」は元来、人々から祭祀され「祖先」や「神」へと変化することが期待されているが、その意図に反して変化できなかった場合、「鬼」は「神」でも「祖先」でもなく、憐みの対象として人間界を漂うことになり、異常で異例な存在として人々に恐れられるようになるというわけである。それでは実際に漢族社会において、どのように「祖先」は「鬼」となり、また祭祀されることで再び「鬼」は「祖先」となるのであろうか。以下では筆者が調査した事例から「鬼」の性格をみていきたい。

中国東南部に位置する福建省は 19 世紀ごろから多くの華僑を排出する地域として知られてきた。1949 年の中華人民共和国成立以降、海外への渡航が厳しくなるが、それ以前は多くの華僑を、台湾、香港、マカオ、東南アジア各地域に輩出してきた。筆者が調査した福建省西南部のL村は、山がちな地形で大規模な水田耕作ができないため、人口支持率が低く、多くの出稼ぎ労働者を海外に輩出してきた。そのL村で 2010 年、ある家族が祖先の墓の修繕を祝う行事を行っており、筆者もそれに参加した。その家族は現在、すべての成員がインドネシアやマカオなどの海外に居住しており、誰もL村に住んでいない。彼らの多くは文革が始まる前に海外へ出稼ぎ労働に出ており、それ以降L村に戻ってくることはなかった。ではなぜ今になって彼らはL村に集まり、祖先の墓の修繕をしたのであろうか。そこには祖先の墓地風水の問題が深く関係している。2001 年頃、その家族の成員が立て続けに亡くなるという不幸な事件が重



なった。彼らはその原因を話し合った結果、祖先の風水が悪いのではないかということになった。つまり、祖先の墓の風水に何らかの問題が起きたため、父系の系譜をひくその一族全体に不幸が次々と生じたのではないかと考えたわけである。彼らはL村に戻り、そこに居住する風水先生に祖先の墓を看てもらい、約10年の歳月をかけ墓の修繕活動を行った。

この事例を先ほどの「鬼」の議論に当てはめて考えてみよう。この家族はもともと祖先の墓地があるL村に代々居住していた。しかし、家族の経済状況を改善するために、20世紀中ごろから成員の多くが海外へと移住し、1980年代にはすべての者が海外に居住するようになった。この時、彼らの祖先を祭祀する人間はL村にいないのである。漢族の死生観に基づけば、人間の靈魂は元来「鬼」であり、祭祀されることで「祖先」にも「神」にもなる。しかしその家族の祖先は、家族が海外へと離散していったため誰からも祭祀されない存在になってしまった。つまり、祭祀されている間は「祖先」であったが、家族が全員海外に行つて以降、靈魂は「鬼」に変化してしまつたのである。「鬼」になった靈魂は、家族に危害をもたらすことになる。2001年頃、その家族の成員が次々に亡くなるという不幸が彼らにもたらされたが、成員たちは立て続けに起こる不幸の原因を話し合い、祖先の墓地を修繕し、祭祀を行う必要があると確認したのであった。その結果、「鬼」であった靈魂は再び「祖先」へと変化したというわけである。

### 3. 祖先祭祀からみる宗教活動の政治性

毛沢東や習近平といった政治の表舞台の話から、福建省の農村部の話へと議論が一足飛びに展開してしまつたが、ここでこの小さな事例を中国社会における宗教の政治性の問題として考察してみたい。というのも、漢族社会におけるこのような民俗知識に基づく死生観は、彼らが生活している社会秩序と無関係ではないからである。たとえば渡邊は「鬼」が住むとされる、漢族の死霊界について次のような説明を行っている。「神に神饌を奉ずればご利益があり、祖先に香典を奉ずればご加護があるというこの契約関係は、政府に租税を支払えば国民としての保証があり、親族に折々の贈答をおこなえば、その良好な関係が永続するという契約関係があるのと同じである」[渡邊 1991: 186]。つまり漢族の伝統的な民俗知識において死者の世界は、生者の世界と似たような一定の契約関係に基づいて構築されており、そこには秩序立てられた体系が存在していると考えられているのである。生者は死者へ働きかけることによって関係性を構築しているわけだが、その関係性は政治的な状況に大きく依存している。

この問題をより包括的に議論しているのが、川口による中国社会における現在の「伝統」文化に関する考察である。川口は現在中国で「伝統」とされる文化の多くが、かつての村落社会と王朝との相互行為のなかで構築されてきたものだとして主張している。王朝時代の村落社会では「人々が王朝の正統とした祭祀の対象と手続きとを受け入れつつ、廟や家屋内で幾多の儀礼をとり行うことで、王朝の権威は末端の地域社会にまで押し広められ、かつ再生産されていった」[川口 2013: 380]と指摘する。つまり、王朝時代における一般庶民の宗教活動は王朝の権威を再生産するための契機になっていたというわけである。では、このような視座に立って現在の中国における宗教状況を考えるとすれば、1960年代半ばから始まつた文革、そして改革開放以降の宗教復興の状況を我々ほどのようにとらえることができるだろうか。宗教活動を封建時代の迷信として全面的に否定していた文革時代は、まさに末端の村落社会にまで「近代」が浸透していく時期であった。先の事例で登場した福建省南西部のL村においても、文革時に祖先祭祀は禁止され、村内の神々はすべて破壊された。王朝時代における宗教活動が権

威の再生産だとすれば、それを一斉否定した文革は過去の政治体制との決別を人々に強要したものだといえよう。では1980年代以降における宗教復興はどうであろうか。

川口は、現代中国における「伝統」文化をめぐる状況を、中央政府と一般庶民との相互補完的な関係というよりも、個別かつ状況依存的なものであると指摘している [川口 2013: 381-382]。つまり現在中国で行われている宗教活動は、人々の自主性も相まって、王朝時代のように単純な構造で描き切れない部分が出てきたと指摘する。とはいえ現在の中国社会において「伝統」的な中国の文化、宗教活動は党および国家の思惑と乖離をみせない範囲において行われるのであって、そこから外れてしまう活動はもはや宗教活動ではなく、反政府的な政治運動になってしまう。たとえば「世界宗教」のひとつであるカトリック教会の活動の場合、中国政府は「天主教愛国会」のみを正式なカトリック教会として公的に認めており、司教の叙階に際しバチカンが関わることを内政干渉と見なしている。2012年7月7日、上海教区にて馬達欽氏がローマ教皇と中国政府、両者に承認され司教として叙階されたが、同氏はその就任演説の中で、今後中国政府が認めている「天主教愛国会」へは参与しないと明言した。同司教はこの発言のため同地区の神学校で軟禁状態におかれ、同神学校も9月以降閉校された状況が続いた。また中国政府が公認しないキリスト教会はすべて「地下教会」と呼ばれ、その規模は数千万人ともいわれている。彼らの一部は北朝鮮の脱北支援に関係したり、一部のカルトは「全能神」という教団名を名乗り中国共産党を名指しで批判したりと、極めて政治性が高い活動を行っている。

このように政治的に「正しい」宗教のみが中国社会における宗教活動なのであって、それ以外は反政府的な政治運動としてとらえられてしまう傾向が強い。だが一方で、政府が合法とも違法とも判断を下さず、自発的な宗教活動を積極的に容認する場合もある。それが祖先祭祀である。改革開放政策が打ち出された直後、1979年3月15日の『人民日報』では、祖先祭祀や鬼神の信仰を名指しし、それらを迷信としつつも公共の政治に影響を及ぼさない限りにおいて禁止の必要はない、と明言している。そして約30年後の2008年、国務院は清明節、端午節、中秋節を祝日として指定することを決定した。清明節は祖先祭祀を行うための日であり、清明節の祝日化は言うまでもなく政府による祖先祭祀容認のメッセージである。このように党や国家の側が死者祭祀を一定程度の範囲で認め、人民の側が毛沢東の祖父や習仲勳の墓地に対して、風水の言説を当てはめ参拝の対象とすることは、現代的な意味での権威の再生産が、政権側と民衆側のインタラクティブな関係において行われていると指摘できるのである。

## むすび

毛沢東生誕120周年から始めた本稿を、再び毛沢東の話で締めくりたい。かつては「悪女」とされた江青であったが、近年、毛沢東ブームの影響で彼女の墓を訪れる人が後を絶たないという。江青の墓地を訪れる人々は、文革時代のスローガンを掲げたり、毛沢東賛歌を歌ったりするなど、かつての共産党体制を偲んで墓地を訪れる。とはいえ現在中国において「建国の父」である毛沢東に関する活動がすべて無条件で認められたわけではない。習政権は毛沢東の生誕120周年に関する全国各地の記念行事に対し、許可なくそれを実施することを禁じる通達を出している。重慶市党委員会書記を務めた薄熙来の事件が記憶に新しいように、毛沢東思想を政府と異なる見解に解釈し、それを独自に利用しようとすることを懸念しているた

めである。毛沢東の人氣が近年高まるなか、習政権は毛沢東思想を演説の際にたびたび引き合いに出し、政権への求心力を高めようとしている。しかし貧富の差が拡大する現在の中国社会において毛沢東は、鄧小平以降、社会主義的資本主義を継承する現政権への批判のシンボルとなりうる可能性を十分に有しているのである。このように、かつての共産党の政治指導者の評価は、あくまでも現在の「政治的な正しさ」のもとで政府に一任されているのである。

もちろん、中国に限らずかつての政治指導者を運動の象徴として掲げ、親（反）政治活動を展開することは広く世界的に見られる光景であろう。だが中国においてそれが意義深いのは、民衆の側がそこに風水という宗教的な「正統性」を加えてそれを理解しようとする点であり、毛沢東故居の滴水洞においても習仲勲の墓地においても、政府の側がそれをあからさまに否定しない点にある。カトリック教会の事例でみたように、政治的な「正しさ」が認定されていない宗教活動は禁止の対象となる。だからこそ逆に、宗教活動が容認されるという状況から、そこに明らかな政治性が見て取れるのである。政治的な「正しさ」、あるいは活動が容認されている宗教活動は、政府が否定しないという意味において、現政権基盤を強化する作用が、少なからず働いていると考えることができよう。

#### 参照文献（日本語）

- 川口幸大 2013『東南中国における伝統のポリティクス—珠江デルタ村落社会の死者儀礼・神祇祭祀・宗族組織』風響社。
- 加地伸行 2011『沈黙の宗教——儒教』筑摩書房。
- 韓敏 2004「毛沢東の記憶と神格化—中国陝西省北部の『三老廟』の事例研究にもとづいて」『国立民族学博物館研究報告』29巻4号、pp.499～550。
- 2008「韶山の聖地化と毛沢東表象」塚田誠之（編）『民族表象のポリティクス—中国南部における人類学・歴史学的研究』風響社、pp.225～261。
- 志賀市子 2012『〈神〉と〈鬼〉の間—中国東南部における無縁死者の埋葬と祭祀』風響社。
- 渡邊欣雄 1991『漢民族の宗教 社会人類学的研究』第一書房。
- 1994『風水 気の景観地理学』人文書院。

#### 参照文献（英語）

- Arthur. P. Wolf. 1978 Gods, Ghosts and Ancestors, Arthur, P. Wolf (eds.) Studies in Chinese Society, Stanford University Press, pp.131～182.
- Guldin, E. Gregory. 1994 The Saga of Anthropology in China: From Malinowski to Moscow to Mao, M.E. Sharpe.

#### 参照ウェブサイト

- 博訊新聞網 2014年2月12日の掲載記事 [2014年4月1日閲覧]。  
[http://www.peacehall.com/news/gb/china/2014/02/201402121647.shtml#.Uzpp6Pl\\_sxQ](http://www.peacehall.com/news/gb/china/2014/02/201402121647.shtml#.Uzpp6Pl_sxQ)